

マネージメント情報

2014 年 5 月



この記事は、機関誌や日常の出来事の中からわれわれが注目した話題を皆様に提供するものです。
ご質問、ご要望などなんでもお寄せくだされば、今後テーマとして取り上げたいと思います。

今回は、2008年4月のM情報に書いた、「牛群雲の如し」を再びここに紹介します。辛苦の根室開拓と先人の偉業を是非もう一度思い起こして、この春の新たな出発の糧にしたいと思います。

いまこそ 「牛群雲の如し」

(株) トータルハードマネージメントサービス 代表 黒崎 尚敏

私は、以前から根室において、「牛群雲の如し」という言葉が時々使われているのをそれとはなく気にしていました。その意味は、なんとなく分るものの、その由来に関して知る機会が実はありませんでした。何人かの酪農家に聞いてみても定かな答えは返ってきませんし、若い酪農家にいたっては、その言葉自体知らないということでした。今回、酪農スピード News でお馴染みの 高宮 英敏による「酪農語録 北海道酪農を築いた人々」の中でそのエピソードが、端的に伝えられていました。このエピソードの大部分は、雪印乳業株式会社から昭和50年11月1日に発行された「牛群雲の如し ー根室酪農の歩み」を参考にしているものと思われます。私としては、この話を広く後世に語り継ぐと同時に、今こそその思いを再び燃え上がらせるべき時だと感じ、この二つの本を勝手に抜粋編纂し、ここに紹介することとしました。

牛群如雲

北海道根室酪農は、平成18年現在、生乳生産量76万3715トン、乳牛頭数18万2700頭という、まさに日本一の酪農専業地帯となった。その酪農の基礎を築くきっかけは、昭和初期の冷害凶作であった。

I. 根室を襲った昭和の大凶作と飢餓

北海道は昭和6～10年の間に、6,7,9,10年と4度の冷害凶作に見舞われていた。昭和6年は春からの天候不順と日照不足によって、農地の9割が被害にあった。翌7年は、さらにそれを上回る大凶作となった。6月29日、初夏というのに根室を大晩霜が襲ったのだ。気温は、上春別1.5℃、標津と西別は氷点下0.5℃、武佐は氷点下1℃になった。これで、大小豆、菜豆、稲キビ、たまねぎ、かぼちゃが全滅した。開墾してもわずかな土地は摩周系の火山灰地であり、ここで暖地型の穀しゆく（穀物と大豆の意）作物を営んだから、冷害にはひとたまりもなかったのだ。この時の霜は、霜というよりは雪と同じだったと古老

は伝えている。昭和4年3月26日に長野県佐久の郷里を立ち、同4月3日上春別に入地した井出祐之助はその時のことを克明に日記に記していた。

「昭和7年6月29日 大霜凍、夜明ヶ前、寒暖計見ルニ零下2度、小豆全滅、イクサ同、黍4分、芋全部ヤケル、中長金時半分、ビルマ7分ヤケタリ。

同6月30日 大被害跡ヲ見ルニ、実ニ惨タル畑ノ有様ニテ、作物ハ黒ク地立ニ立チ、黍白クタレ、モノスゴキ状態ナリ、吾等農民春秋度大敵ノ中ニ此1生命ヲ続ケ行クトハ、萬物靈長モアワレナリ。」

その年の秋、わずかに残った作物を保護すべく、9月中旬以降、官民一致して結霜の来襲を警戒し、燻煙法を行ったが、9月24日未明無情にも根室管内全耕地に大結霜が再び襲い、万事休す、惨状を呈するにいたった。

この時の根室の窮状は想像を絶した。馬糧の燕麦を食料とし、わらび、ふき、ぜんまい、おおばこなど、口に入る野草は何でも食べた。「目下名も無き草根木皮に命を継ぐ者あり」と記されたのである。北海道庁は「燕麦食料化農具」なるものに5割補助を出した。燕麦を人間が食べられるようにするため、発動機・籾剥機・精穀機・圧扁機を一つにした機械であった。北海道庁が移民に当たって宣伝した映画（活動写真）には立派な水田、りんご畑、遡上するサケが写されていた。根室農民は、騙されたと怒り、「生活を救え、保証しろ」と、むしろ旗を立て暴徒化するものも出た。

Ⅱ. 「官」とは・・・ 凶作長官 佐上真一

このとき、この窮状を現地視察したのが、当時の北海道庁長官、佐上真一であった。佐上は東京帝国大学法科を卒業し、京都知事などを歴任後昭和6年10月に第21代北海道庁長官に就任した。在任中、凶作や不漁、水害、函館大火が相次いだため「凶作長官」とあだ名されたりした。130kgを超える巨漢であった。この佐上が殺気立つ根室にやってきた。警察関係者は、「佐上に万が一のことがあっては・・・」と、壇上と農民の間に垣根を作った。しかし、佐上はそれを見るなり即刻、「こんなものは不用だ」と怒鳴って取り外させ、「諸君は陛下の赤子だ。断じて陛下の赤子は飢えさせない。騙されたとって10年、頑張ってくれ。笑って手を握り合える日が来るぞ。佐上を信じてくれ」と訴えた。

佐上の話が終わると、農民は誰一人声なく皆、嗚咽を漏らしたという。ぼろぼろの着物、足の下が透けて見える地下足袋、やせた顔、夕日を背に空箱の上に立つ長官はそれ以上黙して語らず……。後に佐上はこのときのことを、自分がただ伝えなかったことは、「官（自分）は、常に原野民とともにあること」、「君たちだけ苦しませはしない」ということだけだったと回想した。そして「今も私の記憶に残る光景は、計根別の麦畑である。見る限りの麦畑ではあったが、穂は1本も見えず、根元にはジメジメと苔が生え、その畦にはヘソをさらけ出した子供たちが、もしや1穂の青枯でもと探している姿である。ヒソヒソと話し合う人たちの群れを取り巻くものは、湿っぽい陰惨な暗い影で、果ては“1万人のボロの行列”にまで拡大したと・・・。

Ⅲ. 「一路勇往邁進せよ」の大号令

・・立ち上がる根室酪農と酪農の夜明け

佐上は直ちに、凶作罹災者に対する食料給与、移民救済土木工事、税金の減免、医療救護の手を打った。そして、この冷害に強い根釧原野の実現のため、当時北海道製酪販売組合連合会（酪連 雪印の前身）の宇都宮仙太郎、黒澤酉蔵、佐藤善七らの建言を取り入れ、「根釧原野開発5ヶ年計画」を策定した。これが我国初の乳牛飼育（酪農経営）を主体とする地域開発計画であった。計画の内容は、1. 根釧原野にとどまる意思のないものに離農補助金を与える 2. 平均5・10haの所有地を15・20haに拡大 3. 8割補助の乳牛導入 4. 牛乳の受け入れは酪連が行うこと 5. 乳牛飼養管理の指導者の配置 6. 医師の常駐 7. 殖民鉄道や集会所の設置 などであり、根釧原野農業の大転換を図った。計画は、昭和8年から12年まで5年間とされ、この間根室管内に導入された乳牛は8割補助のメス牛2000頭を含め、3000頭以上に達し、酪連も集乳所と製酪工場を25箇所も建設した。昭和8年、当時の根室支庁長、笠島達三は「原野指導標の明示する所に従い、一路勇往邁進せよ」と酪農民を鼓舞激励した。原野指導標とは、開拓道路の4つ辻に立つ角材でその四面にそれぞれ「期内農業開発5ヶ年計画必成」「熱だ、誠だ、真剣だ」「自力更生」「乳と蜜の流るる理想郷」と記されていた。これらの乳牛と施設によって、今日の根室酪農の基が築かれた。酪農の定着によって、根釧原野の酪農民による冷害救農土木工事の要請はなくなった。酪農が冷害を克服したのだ。

Ⅳ. 官人佐上元北海道長官の見た根室の驚異と感謝

佐上は北海道庁長官を辞した後、日本防空協会常務を務めた。昭和18年8月、北海道の防空視察のため来道したおり、「成長した根室酪農をぜひ見たい」と言って、7年ぶりに根室入りした。佐上の乗る自動車が牧草畑を走り抜けると、草刈中の年老いた農民がねじり鉢巻の手ぬぐいを高く高く頭上で振り回した。同乗の植松標津町長（当時）が、「閣下を歓迎しているのです」と説明した。佐上に対する農民の感謝は一通りではなく、こうした感激的な出来事が至るところで起こった。そのときのことを、佐上は「あの手を振った老農がなんと言う人か私の記憶にないが、あの人は、今日、佐上がここを通ることを待っていてくれたのだ。農家の傍らを通るときには、家内中の人たちが家の前に揃って歓迎してくれた。こうした真実のこもった送迎を受けたことはなかった。「驚異的」という言葉は、この根室原野10年の今昔をいうものだ」。

上春別で私が部落の人たちに、心からのお礼を申し上げて会場を出ようとするときに、篤農家井出祐之助君が、「佐上さん・・・」と呼びながら追いつがってきた。「何か用か？」と聞くと「いやなんでもありません。ただ、お顔が見たくて・・・」と涙を流してうつむいた。私も「しっかり頼みます」と手を握ったら「閣下、あのときは本当に無理ばかり申しまして・・・」と言ったあとは、目に手を当てるばかりだったと回想している。

V.根室原野放棄論と牛群雲の如し

北海道興農公社（現 雪印乳業）中標津工場に立ち寄った佐上は、「群がる乳牛の姿を見ると、うれし涙が出る」と言って、硯と筆を持って来させ、「牛群如雲」と揮毫した。「牛群雲の如し」と読む。この時この工場前には、多くの農民が、一升瓶につめた牛乳、かぼちゃ、トーキビを持ってならんだという。佐上は「育ての子らはすくすくと成長して、立派に国家へのご奉公をしているのだ。根室原野放棄論を見事に見返してくれたのだ。」と、涙した。この時佐上は、「笑って手を握り合える日が来た」と思ったに違いない。

昭和40年、別海村の乳牛が2万頭を突破した時、村内の酪農民は関係者の後援を得て、佐上の銅像を建立した。歴代北海道庁長官で道民の拠出金で銅像を建てられたのは、佐上一人だけだ。

別海町役場ロビーにその銅像は置かれ今も、根室酪農の発展を見守っている。

銅像裏の碑文は、黒澤酉蔵が書いた。「長官は本村発展の大恩人なり。連年の冷害凶作にあえぐ本村の実情を深く憂慮、根釧原野開発の根幹を酪農経営に求むるべしとなし、酪農転換に進んで援助の手を差しのべらる。本村酪農発展の基なり。その恩沢を受け深く徳を仰ぐ。長官の遺徳をしのび、功績を後世に伝えるため記念の像を建つ」と記され、佐上の業績をたたえている。（写真）

佐上は、この喜び涙を流したわずか3ヶ月後に、列車内で脳溢血に倒れ、不帰の客となった。

VI.受け継がれるべき根室酪農民「渾身の開拓魂」

酪農根室が今再び、困難のときを迎えている。しかし、この先人たちの辛苦を思えば何ほどのことがあろうか。根室原野放棄論さえ飛び交ったこの時代を、官民一体となって乗り切った「渾身の開拓魂」は、必ず今日の酪農家に受け継がれているはずである。

「根室原野ノ開拓未ダソノ途上ナリ、一路勇往邁進セヨ、根室酪農ニ復路ナシ！！」

官とは、官人とは、民とは、国民とは、なにか
なぜ私たちが今この根室の大地に生きていられるのか
先人の苦勞に報いるとはどういうことか
忘れてはいけない、受け継ぐべき根室の過去がある

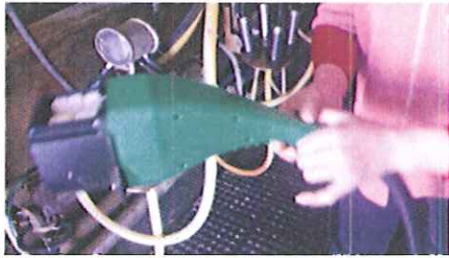
黒 崎



乳頭洗浄機

別海町の N 農場さんで3週間ほど稼働している乳頭洗浄機の使用風景を見学させていただきました。

「乳頭洗浄機」というマシンはこんなもの



機能は洗浄と乾燥。

洗浄：洗浄液ブラシを各乳頭2秒ずつ

乾燥：乾風ブラシを各乳頭2秒ずつ

単純に4つの乳頭を洗浄で1周、乾燥に切り替え1周と、計2周して洗浄と乾燥が片手ですませられるスムーズさに感動しました。



速くて本当に洗浄、乾燥できているのかと疑いたくなりますが、目視ではバッチリ仕事してます！

(ちょっと暗くて見にくいですが。。。)

よっぽど汚れた乳頭は洗いきれないこともあるようで、前搾りの時に確認し、大まかな汚れはタオルで落としてから洗浄機を使うことで対処していました。しかしそれほどの汚れは少ないそうです。



心配な乳房炎について、使い始めてから乳房炎が出たようですが、原因ははっきりしていないようです。乳頭が傷むなどは基本的にはないようですが、消耗品であるブラシが傷んだ状態で使い続けると乳頭も傷んでしまうようです。

◆ 搾乳スタッフが感じる現時点でのメリット・デメリット（主観です）



<メリット>

- ・片手で乳頭洗浄・乾燥が完了する。
- ・パーラー内での人の動線が短くなった。
- ・汚れの落とし具合や乾燥が、誰がやっても均一になった。
- ・マッサージ効果なのか、乳の出し切りが良く、ミルカーの2度が減った（かなり主観的）。

<デメリット>

- ・慣れるまで嫌がる牛はいるので、最初は牛がバタつく。
- ・洗浄機が少し重く、女性では腕が疲れる。
- ・洗浄液が透明で泡がなく、どれだけ洗えているのかやや不安。

効率化については乳頭洗浄機の導入 3 週間時点で、350 頭ほどの搾乳時間が 20・30 分ほど短縮された感覚だそうです。時間についてそれ以上に有益と感じたのは、大量の乳頭用タオルの洗濯と折畳みに使っていた時間を他の仕事にあてられるということ。細かいところですが、日々の雑務が一つ減るだけでもスタッフのストレスは大きく軽減されるのではないかと思います。

導入した理由は、今後の規模拡大を見越した業務の効率化と、搾乳者が替わっても搾乳衛生を均一に保てるということ。さらに道内でも使用例がそれなりに増え、輸入の代理店が現れたことが、導入の決め手となったそうです。

導入の手応えについて、まだ良いとも悪いともコメントは難しいということでした。導入コストに加え、メンテナンス、洗浄液やブラシなどの消耗品といったランニングコストを踏まえ、判断にはまだ時間がかかりそうです。

すでに導入した農家の声も賛否両論あるようで、この農場に適したシステムであったのかどうか、もう少し追ってみたいと思います。

見学させて頂いた N 農場さん、ありがとうございました。



いっきに黒い土から、緑の牧草地と模様替えされ、気分もすっかり春になりました。鹿との交通事故や畑での事故に気を付けつつ、暖かな季節を満喫しましょう♪

BBQ にはぜひお誘いください！！

てらうち

新人獣医師の酪農実習

皆様こんにちは。桜もやっと咲き、スラリーのニオイにうっ通りの新人の茅野です。先日美馬農場で約1週間の酪農実習をさせて頂きました。この場をお借りして簡単なレポートを掲載させていただきます。

はじめに

たった1週間の実習で酪農の「ら」の字も理解したとは到底言えないし、手搾りが農家さんのように超高速になったとも思わない。実習中は動き続ける従業員の方々にただただ圧倒されていた。しかしこれから自分が付き合っていく「酪農」というものに、最初にしっかりと触れられたことは大変有意義であったと感じている。



フカフカ気持ちいい砂のベッド

外仕事

基本は除糞と砂のベッドならし。その繰り返しが重要だと教えられた。牛がパーラーに移動する際は牛舎の様子・雰囲気等を観察するのも忘れない。ベッドは牛が安静に過ごせるだけでなく、乾燥を保ち疾病予防の効果も併せ持たなければ意味がないという。後方から前方に向かって手作業でならかな傾斜をつけていく。ベッドならしの繊細な手さばきは惚れ惚れしてしまうほどであり、早さもさることながらその仕事の丁寧さに驚いた。

搾乳

朝、昼、夜の3回搾乳のうち、朝と昼のみ実習させてもらった。「殺菌なしの生乳をそのままでも(自分たちが)飲みたくなるように搾る」そう話してくれた方はしゃべりながらも、前搾り、プレディッピング後の乳房の張った牛から2頭も3頭もミルクをつけていた。途切れない一連の作業は美しく、前搾りさえ満足にできない自分は焦って出た汗を拭き取ることしかできなかった。

育成(哺育)

哺乳や毎日行っているベッドの乾草交換などをやらせてもらったが、こんなにも根気と体力を使う仕事であるということを初めて知った。担当の方々は1頭1頭に目をかけ、熱を測り、ミルクの飲みやエサの食いを毎日記録していた。その姿は文字通り子牛のお母さんのようであった。

これから...

「酪農家と同じ目線でいることはもちろん大切だが、同じ視点で物事を見ていては意味がない。THMSの獣医として牛を、群を、牛舎を見てほしい。そして獣医学的な助言だけでなく、酪農に関連する様々な情報を提供してほしい」

優社長に言われたこの言葉が頭に残っている。個体診療はもちろんのこと、休みなく働いている農家さんに代わって得た様々な情報を還元できるような、またそうしたアドバイスを求められるような関係をこれから多くの農家さんと築いていきたい(もちろん知識と技術を伴って!!)。

最後となりましたが、優社長をはじめ美馬農場の従業員の皆様には大変お世話になりました。今後もこの経験をしっかりと活かせるよう一層努力していきます。ありがとうございました。



人にも牛にも優しい環境づくり

茅野 大志
(かやの たいし)